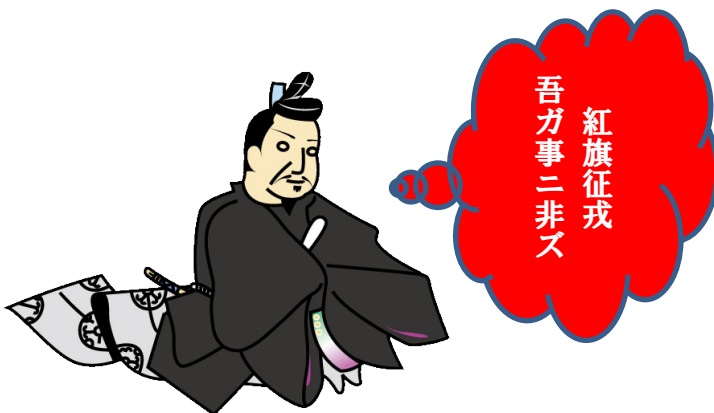


藤原定家の天文記録

castor

作花一志著

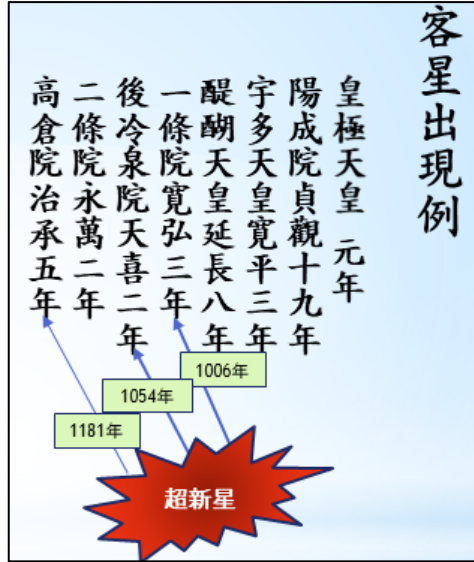




お正月のかるた取りというより冬休みの宿題として、なじみの深い『百人一首』は古くから親しまれています。この百首を選んだ藤原定家（1162～1241）は平安末期から鎌倉初期の歌人で、『新古今和歌集』の選者であり、『源氏物語』や『土佐日記』の研究者として有名です。また書道にも後世に大きな影響を及ぼしています。その彼が、天文学にも大きな貢献をしているのです。

彼は『明月記』という日記風のエッセイを著しています。これは十八歳の治承四年（1180年）から七四歳の嘉禎元年（1235年）まで半世紀以上にわたって書き綴られたものです。書き続けるだけでも偉業です、しかも全部漢文・・・とても真似はできませんね。彼の孤高な芸術最優先を表す有名な言葉は初年度に書かれています。

客星出現例



『明月記』には天文記録が百件以上も集められています。日食、月食、惑星の異常接近、彗星、流星など、特に重要なのは客星（不意に現れるお客さん星という意味）の出現記録です。七世紀から十二世紀まで全部で八件ありますが、すべて晩年になってから陰陽師・安倍泰俊（安倍晴明の八代の孫）に調べさせた古い記録を書きとめたもので、定家自身が見たわけではありません。八件のうち五、六、八番目が超新星で残り三は彗星らしいと言われています。超新星とはそれまで全く見えなかったところに突如として星が輝き出し、一夜にして一万倍以上も明るくなるまさに天変です。実は星の最期の大爆発で、星の生涯のうち最も劇的なシーンです。望遠鏡のない時代の超新星の出現記録は世界中で七件しかありませんが、そのうち三つも記載があるのは世界に『明月記』だけ。わが国の陰陽師は非常に貴重な記録を残したのです。これにより二〇一八年三月、日本天文学会により『明月記』はわが国最初の**日本天文遺産**に指定されました。

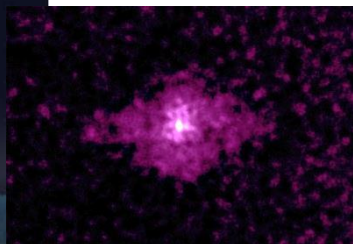
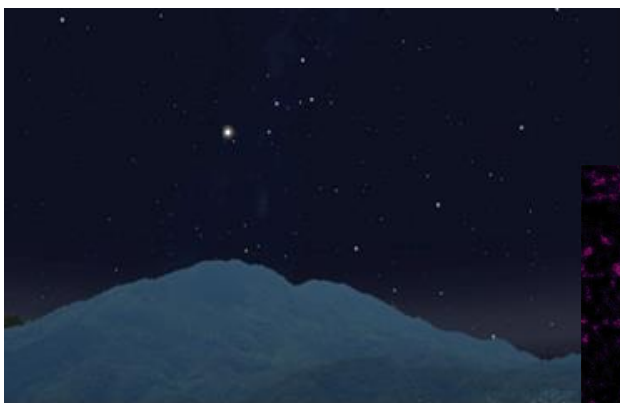


寛弘三年四月二日（1006年5月1日）の深夜、南の低い空に出現した大客星は、半月くらい明るく輝いたそうで、日月を除けば人類観測史上最も明るい天体です。鴨川の橋の上から眺めると南の空低く、マイナス8等の大客星が、その左（東）上には火星からさそり座が見えたことでしょう。陰陽師・安倍吉昌（安倍晴明の息子）によつて観測され『明月記』には「大客星」と記されています。中国の記録によると、3〜4ヶ月も見えていたそうで、その他にエジプトやスイスにも簡単な記録があるそうです。今日、おおかみ座超新星残骸と呼ばれ、可視光では非常に淡いですが、電波やX線では高エネルギーで輝いています。I型超新星であり2006年に出現千年を記念してX線天文衛星「すざく」が観測しています。



最も有名な客星は天喜二年（1054年）に現れたもので、中国の『宋史天文志』によると「月三日になります。夜明け前の東山の上には新月前の細い月と木星くりに輝いた明るい客星が見えていました。月の上にすばるが、下にはアルデバランが、また左（北）にはカペラが見えます。客星は最輝期には昼間でも見え、約二年間も見えていたそうですが、その後消えてしまつて人々の間からは忘れられていました。この客星のことは日本中国の他はアラブに簡単な記載が残っているだけでヨーロッパには全く記録がありません。

十八世紀になつて望遠鏡観測によりそこに淡い星雲が見つかり、見かけ状から「かに星雲」と名付けられました。二十世紀になつてから、この星雲は膨張していることがわかり、逆算すると約九百年前の爆発の名残らしいということになりました。そこでそれに該当する記録捜しが世界中で行われ『明月記』の記載がクローズアップされ、定家は世界中の天文研究者の間で有名になりました。



治承五年六月二十五日（1181年8月7日）東北天カシオペア座に土星のような色の客星が現れました。この前年に定家はすでに『明月記』を書き始めているので、十九歳の彼自身が見ていないでしょうか？この前年には東国武士たちが源頼朝を担いで挙兵し、この年の早春には高倉院次いで平清盛が亡くなっています。その夏に洛内から見ると比叡山上の天空に見慣れぬ明るい星が突如、出現してかつ消えていったのです。この年には旱魃による大飢饉が起こり市中の死者が四万人（！）以上も出たと『方丈記』に書かれています。鴨長明から見れば、客星出現よりも源平の争いよりも大飢饉の方がずっと深刻な事態だったでしょう。

現在この場所には3C58と言う名の電波やエックス線を発しているが、光ではほとんど見えない超新星残骸があります。残っている中性子星は八百歳という年齢の割には冷え過ぎて、内部に詰まっているのは中性子ではなくクォークであり、この星はクォーク星だとも言われています。



射場保昭(1894－1957)

欧米の天文研究者に紹介

Popular Astronomy (1934)

かに星雲の客星出現を世界に紹介したのは、神戸のアマチュア天文家である射場保昭です。彼が英天文誌「Popular Astronomy」に寄せた記事「Ancient Records of Novae (Strange Stars)」がヤン・オールトラ研究者の目に留まったことがきっかけで、かに星雲が1054年の客星の九〇〇年後の姿であることが明らかになり、超新星爆発のメカニズムの研究が大きく進展しました。彼の本業は貿易商ですが自宅に私設天文台「射場天体観測所」を開設して海外の天文研究者と交流していました。

これらの天変記録は

平安中期に安倍晴明の子孫である陰陽師が観測し記載し

鎌倉初期に安倍泰俊が陰陽寮の記録を見つけて

藤原定家が『明月記』に転記し

昭和初期に神田茂が『明月記』の中の客星記事を発見し

射場保昭が紹介して世界中に脚光を浴びるようになった。

実に一五〇年間陰陽寮に、七〇〇年間古典の中に、眠っていたことになりました。



超新星は宇宙全体からみれば決して珍しい現象ではなく、あちこちの銀河の中に一年に百個以上も発見されています。出現時には一夜にして十等級（一万倍）以上も明るくなり、電波・赤外線・可視光線・紫外線・X線・ガンマ線さらにニュートリノとあらゆる形態のエネルギーが一挙に放出されます。

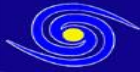
明日にでも超新星爆発を起こして輝く星があるでしょうか？もし近距離の星が超新星爆発を起こしたら、夜の暗さはなくなるほどでしょう。しかし太陽、シリウス、ベガなどは普通の（軽量級）星は超新星爆発は起こしません。超新星候補星としてよく例に挙げられるのはオリオン座の左上の赤い星ベテルギウスで、太陽の数百倍にまで肥大化しています。最近変光やガス放出が観測され、近いうちに大爆発の噂が飛び交っています。ベテルギウスの距離はかに星雲の距離の約十分の一ですから爆発の規模が同程度とすると百倍も明るく見えるはずで、最輝時には満月くらいに、いやもっと眩しく輝くでしょうが、二、三年後には消えてしまつてオリオン座はさびしくなることでしょう。そしてやがて超高速で膨張する「ベテルギウス超新星残骸」が見えてくるでしょう。

低緯度オーロラ



2001年11月24日 21:25 (JST)

キヤノンEOS1N 24mm 露出時間: 5分 フジSUPERIA400



りくべつ宇宙地球科学館（銀河の森天文台）

『明月記』には治承四年九月十五日（1180

年10月5日）に彼自身が明月蒼然の中で大流星を見たことが記されています。また建仁四年一月十九日（1204年2月21日）には「北の空から赤気が迫ってきた。その中に白い箇所が五個ほどあり、筋も見られる。恐ろしいことだ」という記載がありますが、赤気とはオーロラのことです、と言ってもアラスカで見られる揺れる緑のカーテンではなく、低空が赤く染まったり山火事のように見えたそうです。このように定家は自然現象にもかなり関心を持っていたらしく文理両道の人ですね。

なおオーロラは推古時代に飛鳥で、本能寺の変が起こった天正十年に京・安土で、江戸時代には九州でも見えたという記録があります。



晩年彼の邸は京極（寺町通り）二条あたりにあったようです。そのため京極中納言と呼ばれました。右はその地に建っている石碑です。

嵯峨野には定家ゆかりの地がたくさんあります。二尊院には没後七百年の記念碑（左）や百人一首編纂の地と伝えられる時雨亭址の碑があります。時雨亭は常寂光寺、厭離庵にあったとも伝えられています。渡月橋の近く時雨殿は百人一首の殿堂です。さらに嵐山・嵯峨野地区一帯には百人一首歌碑が建っていて、お好みの歌の碑を探して歩くのも楽しいでしょう。

また源氏物語に登場する野々宮や平家物語に登場する祇王寺もこの近くです。

ところで百人一首には必ずしも秀歌ばかりではないようです。次の三首はよく似ていますね。

秋の田の仮庵の庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつつ 天智天皇

君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ 光孝天皇

君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな 藤原義孝

次の四首は才女（サスガ）の即興歌です。千年前にこんな才女がまたおわした宮廷は世界中で平安京だけでしよう。

大江山いくのの道は遠ければ まだふみも見ず天の橋立 小式部内侍

いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな 伊勢大輔

夜をこめて鳥のそらねははかるとも よに逢坂の関はゆるさじ 清少納言

有馬山猪名の笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする 大式三位

定家自身の歌は

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩の身もこがれつつ

待ち人來たらずイライラしている女になって詠んだ歌とされていますが、実は赦免使を待つ後鳥羽院の心中を察して詠んだのではないのでしょうか？定家は承久の乱の前年に後鳥羽院から謹慎処分を受けていたので、この乱には関わりなし、むしろ親鎌倉派と目されます。歌壇の中心に返り咲き、念願の中納言に昇進しますがあまり喜べない。それは後鳥羽院の怨念に祟られるのが怖いからでしょう。恨めしい悲恋の歌と見せかけて実は鎮魂の歌。もつといい歌は山ほどあるのに、どこからも恨まれないよう、あえて駄作を選んだのでは・・・と思えてなりません。

劉十九同宿

紅旗破賊非吾事
黃紙除書無我名
唯共嵩陽劉處士
圍棋賭酒到天明



そこで思いだされるのが最初のページに記したあの有名な件です。
紅旗征戎吾力事二非ス

時は平氏没落、源氏台頭、後白河院暗躍のころで、彼は世の権力争いなど背を向けて学問に励んでいるように思えますね。しかし本当に十九歳の若者の言葉なんでしょうか？むしろ後世、書き加えたのではないかという説もあります。

というのはこれより四十年後彼は同じような状況に遭遇します。鎌倉から大軍が京に攻めて来て、後鳥羽院はあっさり敗退、隠岐へ流罪、承久の乱ですね。定家は鎌倉幕府・新朝廷に身の潔白を主張し、こう言いたかったのではないのでしょうか。

「私は院の陰謀には加わっていません。この通り若いころからずっと歌一筋です」と。

また右は唐の大詩人白居易の詩ですが、そっくりですね。盗作というより、白樂天の詩を知っていることも傍証証拠に挙げている？

定家の孫である冷泉為相（ためすけ）から始まる冷泉家は、歌道の宗匠家の内の一つで冷泉流歌道を伝承しています。冷泉家は、烏丸今出川東入ルにあり周りには同志社大学となっています。（左 後藤正明氏提供）